

# 東京多摩地区現代俳句協会

## 多摩のあけぼの

会報 No.157



俳句の両極／今私たちは  
何を考えるべきか

黒岩 徳将

現代俳句協会青年部長の黒岩です。「俳句の両極」ということを考えています。私たち協会員は百年先を見据えて俳句の世界を深く耕すために何をすべきでしょうか。私は、個々の俳人の凝縮された俳句観のぶつかりあいが大事で、そこに俳句の「両極」があると考えます。中村草田男、金子兜太、高柳重信はこれを実践しました。私も、誰かと「これ以上話しても無駄だ」と思うまで俳句価値観を交換したいです。

会誌「現代俳句」では特集「昭和百年／戦後八十年 今、現代俳句とは何か」を設けています。理事二十五人アンケート「2. 現代俳句の「現代」を時期として捉えらる」と「平成以降」と回答したのは黒岩のみ。生まれていない時代の俳句を

多摩風土記（烏天狗道祖神）  
町田市成瀬地区の地藏坂の横に道祖神が祀られている。烏天狗の姿が彫られ像の左右には「奉建立 道祖神 武州成瀬 東光寺村」と刻まれている。江戸時代中期の一七〇〇年代の作で、天狗型の道祖神は全国的にもめずらしく、成瀬地区にある他の二体とともに、二〇二五年三月町田市教育委員会により町田市有形民俗文化財に登録された。（小山健介）

「現代」と断じることが私にはできません。世界の自然・文化情勢が目まぐるしい勢いで変わり続けている中、俳句においても「変化」にできる限り注目したいと思っています。二〇二五年角川「俳句」合評鼎談を一年間担当して感じたことは、若手とベテランの「詠み」と「読み」の価値観の断絶です。世代間交流によりこのギャップを少しでも顕在化させたり埋めたりしたく、その先によりやく平成・令和俳句の検証が進みだすのではないかと思います。しかし、俳句史に輝く昭和の名句を無視することもできません。「一句への肯定評と否定評の共存」の例を挙げてひとまず「熱」を感じ取ってみます。

角川「俳句」は平成時代に名句の検証特集を2回行っています。二〇〇六年二月号「本当に名句なのか？ 評価の分かれる有名句」、二〇一四年九月号大特集「これは名句なのか？」。二〇一四年の方が、評者同士の対立点が明確で面白く、一部紹介します。有名句に対して痛烈な批判は少なく、否定的意見の方が評者にさまざまな負荷（反例の顕在化、可能性の浮上など）がかかるためかと思えます。

あめんぼと雨とあめんぼと雨と

藤田湘子『神楽』

駒木根淳子は「最大の魅力はリズム感である。(中略)五感を存分に働かせ、極限まで単純化して即物的な表現のみまで徹した作品なのだ。(中略)聴覚にも訴えた平成作の名句にまちがいない」と述べています。今井聖は、表記の簡明さにおいて「さきみちてさくらあをさめぬたるかな 野澤節子」と比較し、「平凡な景の中の二物、〈あをさめぬたる〉のような見せ場がない。(中略)型は決まったが内容が希薄。言うならば技法瘦せ」と言っています。駒木根と今井で異なるのは、この句(もしくは俳句全般)における、「技法の持つ感性への影響」をどれほど重要視しているかということです。

昭和の時代に賛否の意見が分かれた俳句を数句挙げます。

甘草の芽のとびとびのひとならび 高野素十『初鵲』

虚子は、「一見まことに古いやうに見えて、しかも千古を通じて新しいものがある。それは『まこと』である。動かすべからざる真である」「小規模だとか一木一草といつて捨て、しまふ人の心持は私からいへば甚だ残念なのである」(高濱虚子「秋櫻子と素十」、「ホトトギス」昭和三年十一月号)

この句の虚子評価に対し、秋櫻子が反駁文「『自然の真』と『文藝上の真』」を「馬酔木」昭和六年十月号に掲載。

秋櫻子は、「自然の真」の他に、何物の加へられたるありや「『文芸上の真』」とは、鉾にすぎない『自然の真』が、芸術家の頭の溶鉱炉の中で溶解され、然る後鍛錬され、加工されて、出来上がったものを指す」と書いています。現在でも俳句を考えると素十(虚子)・秋櫻子どちらの価値観・方向性に賛成するか、は初学者の問いかけとして「今後自分がどのような俳

句を作りたいか」を考えてもらうために有効です。

ただ、素十句に関しては後年になって、高山れおな「この精妙な観察をトリビアリズムと決して思わない」(角川「俳句」二〇〇六二)四ツ谷龍の「同じものが「一定の時間を置いて」出現するさまを句にしたりしている」「自分の心の中の下絵に合った風景だけを取捨選択して句にしていた」(角川「俳句」二〇一八二)などの別観点の読みが提示され、単純な二項対立を超えられています。

鰯雲人に告ぐべきことならず 加藤楸邨「寒雷」

山本健吉「季語と主観的感慨との強引な衝撃」「現代俳句」平井照敏「詩的な想念を強くもりこみながら、謎をとどめた、稀な例」『沈黙の塔』

高柳重信「一般的でありながら同時に個人的な日常次元の単なる感懷を、平板に叙述するだけで、それを一回的な表現の次元に高めるための、作家としての独自の自己限定が、わずかに「鰯雲」(中略)という季語のみにとどまっている、これらの俳句構造の単純な脆弱さを、少しく批判したことがあった」『バベルの塔』

現実世界の手触りを基盤にするか、言葉の自律性を重んじるかの差異が重信とそれ以外にはあります。

彎曲し火傷し爆心地のマラソン 金子兜太

金子兜太・中村草田男の角川「俳句」における往復書簡にて、草田男が兜太句を添削しています。

貴君の場合は、十七音詩たらしめるための、機構の不備、有機性の欠如から直ちに破綻が生じてきているといわざるを得ま

せん。(中略)

### 彎曲し火傷し爆心地のマラソン

若し、私が、この作品の難解性を緩和し、より達意のものたらしめようとすれば、甚だ失礼ですが、さしずめ次のようにでも表現するでしょう。

### 爛れて燃れて爆心当てなきマラソン群

〔中村草田男全集 9〕より〕

草田男は元句が「念頭操作」により「徒らに派手」であること、表現が粗雑であること、季語の有機性の考慮のなさを問題にしています。草田男・兜太の一往復において最も強調されたのは季語に関する立ち位置の差異だったが、マラソンの句の添削前と後の比較、そして元句が歴史に残ったことについては、もう少し議論されてもいい気がします。

### 一月の川 一月の谷の中

長谷川權はこの句を激賞します。

### 飯田龍太『春の道』

「もし」「この句がピンとこない」という人がいれば、自分の俳句には俳句を読む力と詠む力が果たしてあるのか、あらためて根本から考え直したほうがよろしい」(董振華『語りたい龍太 伝えたい龍太 20人の証言』(コールサック、二〇二四))。この後長谷川は「一月の川」の句の良さを「単純明快」「壮大な空間が幽玄の世界に続いている」「普通の世界を詠んでいる」の三点だと指摘します。

筑紫磐井は同じ肯定評価でもかなり観点が異なり、対句的反复表現法が龍太の表現にいかにも多用されている表現であるか汎用的に例証豊かに述べた後、龍太の文体的特徴を「月並」とい

う言葉で要約しています。(林桂「詩学」一九九四・八『俳壇時評「飯田龍太の彼方へ」の彼方」)

二人の論を踏まえて、黒岩としては、「一句成立を支えている他の要素として「谷」の持つ外界から取り残された厳しさ、下降のイメージ」を指摘しておきたいです。龍太や權が重視した「無名」「普通」を感じるためには、基盤となる体験が必要であり、作者と鑑賞者の間の様々な体験ギャップにより、良さが感じられないこともあるのではないのでしょうか。

今後の展望として、ここまで見てきた「両極」の例が、果たして平成・令和以降の俳句検証に益するかを考察したいと思います。

青木亮人は「俳句の変革者」(二〇一七、NHKテキスト)で次のように述べています。

一九八〇年代から二〇一〇年代に至る現今俳句界は、俳句史上、最も「平均値」の高い句が詠まれ続けているかに感じられます。(中略)各流派や系譜、俳句史の流れとも無関係に、自身の好みに従って、膨大なデータベースから、フラット情報として掘み出し、魔法のように自在に「うまい句」を吐き出している。これは作者本人がそのように自覚したというより、もはや加藤楸邨のように「大きくて野暮」な何かで勝負する時代でなくなった、ということです。

「大きくて野暮」が再興している気配は見られないが、「うまい句」に対しての意識については変容があります。俳壇に眠っている若手の作品を総合誌・結社誌・同人誌・インターネットで掘り尽くしたいと思います。

# あけぼの集

さよならに余韻の残る霜夜かなさいたま 青木 鶴城  
 黎明の明石海峡神の旅 八王子 青木 隆  
 戦争ははじまらないはじめるのだ薺 八王子 赤野 四羽  
 鱗雲まだまだ未来広がりぬ 国分寺 秋山ふみ子  
 腰痛永し色なき風を鷺撫む多 摩 足立喜美子  
 ファーストシューズの追ひかけてゆく鰯雲小 平安達 昌代  
 横顔の表情読めず夕時雨清 瀬 穴原 達治  
 てのひらに昭和の匂ひなあれ稲 城 新井 温子  
 老と云ふ孤独と気儘花野道 八王子 荒川勢津子  
 大根や刃の透き具合考察す町 田 有坂 花野  
 人は皆銀河の記憶持ち生る 狛 江 有原 雅香  
 初東風をまといて里の宅急便 国分寺 安西 篤  
 八つ当りしそんな貌の蝨 足 立 飯田 和子  
 春光や生きられるまで生きてみる 東久留米 飯田 玉記  
 右足の小指骨折年詰る多 摩 石川 春兔  
 小夜時雨小石のように君は逝き小 平 石橋いろり  
 木の葉一枚歳時記の葉とす青 梅 一ノ瀬順子

手先から透け出しそうな朝寒し日 野 一関なつみ  
 ゆつたりと年賀状仕舞ひの音を聞く 狛 江 伊東 類  
 放埒の果ての有りやう枯蓮町 田 稲吉 豊  
 苦味大根少年のいらだち読めなくて京 都 岩佐ひすい  
 小春日やクルーズ船の太っ腹 西東京 内田 牧人  
 一本の鶏頭の緋が胸を去らず 武蔵野 江中 真弓  
 天日<sup>てんび</sup>にんげんをそうぞうしなおしてください 府 中 大井 恒行  
 梟は平和の盛りすぎてゐる 府 中 大石 雄鬼  
 冬銀河既に無いかもあの星も多 摩 大石 ゆめ  
 落葉雨庭と裏山混然と日 野 大槻 正茂  
 どんと焼き心の飾りもひつくるめ川 崎 大西 恵  
 寒犬や夜更に超ゆる蒲田川 三 鷹 大森 敦夫  
 「ハンガリー舞曲」<sup>じょうじやう</sup>嫋嫋アジア冬入り日 昭 島 岡崎たかね  
 黄落や府中刑務所大看板 三 鷹 小川 葉子  
 稲架掛けや鴉が西の空見てる川 崎 尾崎 太郎  
 雪霏霏と錦の酸ヶ湯モノクロへ 昭 島 尾関 英正  
 落書きや桂落葉の底の底 青 梅 小野こうふう

# あけぼの集

電柱の首を取ったり寒鴉立 川花 朶  
 偏屈のごとき花梨の実を愛す立 川片倉みちこ  
 老いの身に一泡ふかせ初時雨 鳥 亀津ひのとり  
 今年の漢字は「熊」とは熊知らず 熊 谷金子うさぎ  
 梅の香やお喋り夢中婆仲間 西東京河 順子  
 蛸の久遠に響く谷地田なり立 川川島 一夫  
 振り向けば一瞬の秋冬帽子 清 瀬神崎 幸子  
 たんぼの絮吹き老後はぐらかす小 平城内 明子  
 一筋の湯気立つ頭寒稽古大 田小泉満知子  
 新米も古古米もみな地の恵み三 鷹高坂 栄子  
 少し濃くなる人間関係十二月 西東京幸村 睦子  
 一茶忌の蠟石で描く観覧車小 平後藤 行雄  
 いくたびも紙漉くように平和かな府 中小林 育子  
 冬灯神田書肆街カレーの香 あきる野小林マリ子  
 墜ちてなおつややか冬の雀蜂町 田小山 健介  
 AIのハルシネーションうそ寒し立 川齋木 和俊  
 路地裏に一六銀行一葉忌多 摩齊田 仁

鰻重を待つ間のスマホ禁止令 昭 島坂本 空  
 この頃や西も東も冬紅葉 小金井櫻 さとみ  
 小鳥来る真澄の空をまつすぐに 東久留米 佐々木克子  
 キスをするラストシーンに散紅葉 府 中笹木 弘  
 投句する切手はムーミン 鳥渡る 府 中佐藤 栄子  
 人らみな魚の裔なり月仰ぐ調 布佐藤 茉  
 深大寺三時は紅葉降る時間 昭 島佐藤 光子  
 片隅は落ち着くところ冬の蜘蛛 杉 並島 彩可  
 ふつふつと豆腐煮え花滋味を喰う足 利清水 弘一  
 青蜜柑リレー走者でありしころ 世田谷 鈴木 浮葉  
 奥多摩の紅葉は如何に熊ニユース立 川鈴木かずえ  
 友来たるシルバーカーに柿乗せて小 平鈴木 寿江  
 君先頭しんがりは恐竜あきのみち 小金井鈴木 佑子  
 小鳥来るアトリエの窓全開に板 橋諏訪部典子  
 投函のポストと並ぶ金木犀小 平関 梓  
 目礼しすれ違う女<sup>ひと</sup>冬の蝶小 平高瀬多佳子  
 秋の夜昭和の翳をまとひけり 西東京高原 桐

# あけぼの集

小鳥来るけふより喜寿に向ふかな清 瀬谷村 鯛夢  
 豆電球ほどのしあわせ星月夜 国分寺 玉井 豊  
 薔薇だ薔薇前に彼方に色一杯 稲城 玉木 康博  
 しりとり終りは「ん」よ寒の木瓜 日野 玉木 祐  
 石路の花生意気になる一年生 立川 田村 明通  
 寒月や神官に遭ふ帰り道 三鷹 田山 光起  
 古日記スプーン一杯分の悔 武蔵野 津久井 紀代  
 未練未練棺の蓋が閉まるまで 八王子 辻 升人  
 辛くとも行かねばならぬ私の細道 八王子 辻 丕子  
 惜命忌紅葉散らして過ぎにけり 清瀬 寺島 美美子  
 終日を老人でいる敬老日 西東京 戸川 晟  
 爪切るも介護の一つ 秋日和 杉並 飛永 百合子  
 捨てられぬ古いミシンと年を越す 清瀬 永井 潮  
 酷き世を幾年木の葉降りしきる 立川 中條 啓子  
 昭和史の大半生きて日向ぼこ 西東京 中田 とも子  
 断りの端でつまずき秋暑し 座間 長野 保代  
 御旅所に兜太のよぎる秩父祭 武蔵野 夏目 重美

町に出て熊の親子の帰る場所 町田 成戸 寿彦  
 深入りはせずに相槌海鼠食む 国分寺 南行 ひかる  
 雪舞ふや檜皮の千木の神さびて 西東京 西川 五月  
 返り花夜更けのふとき救急音 世田谷 西前 千恵  
 月の舟堅田を遠くすぎゆけり 昭島 西村 智治  
 紅葉の溪谷大河となり海へ 三鷹 拔山 裕子  
 空き箱に空き箱重ね十二月 八王子 沼田 博古  
 大根引く多摩丘陵を見渡して 三鷹 根岸 敏三  
 小春日やデフリンピックの切手貼る 三鷹 根岸 操  
 窓際のポインセチアにある平和 小平 野口 佐稔  
 寒波急顔認証のやりなほし 羽村 野島 正則  
 木枯や眼下に秩父光り合う 青梅 萩原 芙沙  
 風除や磁力狂ひ出す砂丘 小金井 平井 葵  
 ポロ市の鉄腕アトム 領きぬ 八王子 平山 道子  
 見はるかす白富士 東都畏まる 八王子 広井 和之  
 埋火や燃す文殻に失せぬもの 練馬 淵田 芥門  
 枯れてゆくものに加わり枯葉踏む 八王子 冬木 喬



# あけぼの集

声となるまで空の色十二月国 立前田 弘  
 うつかりをぶらさげながら落葉踏む国 立前田 光枝  
 鳥啼くやふりみふらずみ朝時雨国分寺松井 彰穂  
 心にはまだ父母が居て冬ぬくし八王子松元 峯子  
 人間に生まれたキセキ臘月東久留米三池 泉  
 愛犬のぬくもり欲しい立冬よ東久留米三池しみず  
 望郷や夕陽に光る木守柿小金井三浦 長閑  
 パスワード変えて枯野へ歩き出す世田谷三浦 文子  
 年齢<sup>とし</sup>だから御法度花茨剪る町田三木 冬子  
 手袋やつないだ手とハンドセル東和水落 清子  
 呱呱の声すなはち年の改まる三鷹水野 星間  
 菊人形とふ棺花のごときもの日野満田 光生  
 星なき夜熊よりも身を寄せ合はす小平見原万智子  
 ふらここに八十路の重さ揺らしみる昭島宮腰 秀子  
 やまいだれの散らかるわが家大掃除調布宮崎 斗士  
 御帰宅の猫のしっぽに露ひかる国分寺武藤 幹  
 何の因果か耳石動きぬ花八手小金井村井 一枝

芙蓉から子供飛び出しかくれんぼ立川村松 泉  
 びいどろの風や荒野の渡り蝶岐阜 卓村山 恭子  
 中年の明るさ榎植の実のたわわ熱海望月 哲土  
 干柿のひとつひとつが持つ疼き東村山森本由美子  
 かりん手に雲の凝固を見ていたり三鷹守谷 茂泰  
 故に我在りジープンといふ穴の中三鷹柳生 正名  
 背後より冬日を浴びて歩きたる町田山崎せつ子  
 りんご剥く切目の増える誕生日府中山本 徳子  
 壊れゆく妻看取る友の霜月かな多摩山本みつし  
 おたがいの無事を確かめ年賀かな調布豊 宣光  
 浮きそうな膝を抱えて後の月稲城好井 由江  
 虚空視る百舌よ私も暮れていく三鷹吉川 真実  
 テレビからミサイル発射栗墜ちる東久留米吉平たもつ  
 萩ゆるる女ごころのしなやかさ町田米倉 信山  
 年齢を重ねる至福かぶら汁立川米澤 久子  
 熊いかに西村山郡朝日町小平我妻 民雄  
 末席に天才がいる初旬会青梅渡部 洋一

青木 隆

太陽系抜け出て須弥山秋の風

望月 哲土

太陽系抜け出てとはいかにも現代的な言葉であるが、その先に須弥山という仏教の世界の中心に聳え立つ高山がくるとは驚きであった。悟りを開けば須弥山を見ることが出来るのかもしれない。どんな景色なのだろう。

赤野 四羽

裏拍で加はる夕焼のセツシヨン

安達 昌代

裏拍は、ジャズやブルースのスイング感に欠かせない。絶妙なズレの感覚に、無限の奥深さが潜んでいる。一日が裏返つて夜を迎える夕方は、まさに裏拍の時間だ。夕焼の太陽が地球のリズムを奏でる。人間と世界がセツシヨンしているような一句だ。

安達 昌代

仕事と家庭以外も団栗とかあるよ

赤野 四羽

何とも心優しい人生の応援歌である。暗喩としての「団栗」が象徴するのは、目覚ましく何かの役に立つわけではないが、素朴で愛らしく掌の中で温めていたいような大切なもの、といった辺りだろうか。確かにこれも生きてゆく為の必需品に違いない。

新井 温子

八月の飛行機雲がまだ消えず

好井 由江

この句を見た時、作者の意図とは違うかもしれないと思いつつ、マリアナ諸島の一つテニアン島を思い出していた。サイパン島の隣にあるテニアン島は、戦時中B29が日本に向けて飛び立った島だからである。私の祖父母達はサイパン島に今も眠る。

荒川勢津子

「銀漢の彼方に居る」と考妣より

有原 雅香

父母はもとより夫も他界しました。姿は見えませんが、遙かよりの大きな慈愛に守られて日常を過ごすことが出来ます。心強い御句。

有坂 花野

行く秋や日毎つのりし未知の老い

成戸 寿彦

「未知の老い」にはとさせられました。なんと迂闊に生きているものか、ただかつて経験したことのないのはがゆさ、これが「老」というものだったのか。食べたいものを好きにだけ食べると大見得を切つて大根を刻めば、指迄刻んでしまう哀しさ。

飯田 玉記

ひとり住む卒寿の母や鰯雲

小野こうふう

一人暮らしのお母様を案じての句。大丈夫。歳の老い方はそれぞれでお母様は心と体の機能をしっかりと保ち自由な生活を愉しんでいるのでは。今のまま数えきれない鱗ほどにもっともつと長寿で居らして下さい。

石川 春鬼

私には見えない私天の川

中田とも子

なぜ「天の川」の季語なのだろうかと考えた。作者は天の川を仰いでいるが、その先に誰かの面影を見ているのでは。いつも自分を肯定してくれる人がいたのに、今はいない。「私には見えない私」の表現に不安な心情が読み取れる。

岩佐ひすい

先ず一度拒否してみたい茄子の花

玉井 豊

「親の意見と茄子の花は万に一つの狂いなし」との格言を聞き親や年長者の意見を一度は拒否したいと思う作者に共鳴しました。私自身若い頃、何だかんだと反発していたものの結局親の意見は無視出来なかった自分の気持ちを代弁してくれた一句です。



大石 ゆめ

私には見えない私天の川

中田とも子

あくせく余裕のない日々、夜空を見上げ星を探すことも忘れていたのに。そうか、自分が自分であることも忘れていたのかも。天の川さん、私はどう見えますか。

大槻 正茂

八月の飛行機雲がまだ消えず

好井 由江

飛行機雲そのものは大空にある人間のつけた足跡のようなものですが見た者の心を動かします。八月は広島、長崎の原爆の月です。難しい言葉を使わず、写生句のような句ですが印象深い俳句になっています。下五の「まだ消えず」がとてもいいです。

大西 恵

星月夜ほくら生命樹の途中

広井 和之

生命の源、成長、繋がり、永遠性などの根源的なテーマを表す象徴とされる生命樹。星月夜を見上げている生命樹になる途中の「ほくら」。星月夜と生命樹といった壮大なものと「ほくら」との見事な対比に感嘆した。

岡崎たかね

新月の沖から空母来る日本

吉平たもつ

日本では12月20日が新月。そのとり合わせが空母とは。原子力エンジンで核兵器搭載の爆撃機が次々と発進して行く。クイズ「防衛装備品の移動」を四字熟語で〇〇〇〇又は〇〇輸入。科学の究明は人類の幸のために。宇宙の伝説も語り継ぎたい。

後藤 行雄

藻の花やどこかには効く痛み止

一関なつみ

この何年か、肩、首、膝と痛みがある。痛みは、不安なものだ。漢方を煮だして飲む。この句の、どこかには効く、に慰められる。藻の花の季語に、滞った血流がさらさらと流れ出す効能があるようだ。

櫻 さとみ

まず一度拒否してみたい茄子の花

玉井 豊

一度断つたら「そうですか」となるZ世代。「そう言わずにまあまあ……」となる昭和世代。ほーっと置いてけぼりくらうかのような茄子のイメージか、はたまた花がすべて実になるので無駄がないという言われを取り合わせたのか。愉快な句。

佐々木克子

差す手より引く手かなしや風の盆

安西 篤

風の盆ではありませんが、私の故郷秋田にも西馬音内の盆踊りという有名な踊りがあります。姉の嫁ぎ先で何回か見たことがあります。何ともいえない優雅な踊りで、特異な衣装を着て街中を一晚中踊り歩く。差す手引く手の優雅さはそれは見事です。

笹木 弘

もらわれてすぐまわりだすメダカの子

幸村 睦子

おそらく子供が誰かから貰って来たのだろう。早速、小さな水槽の中に水を入れて、貰って来たメダカの子をいれた。すると、何とも無かったように元気に泳ぎだした。何故か嬉しいような気分になってくる。ひらがなの表記も句を優しくさせている。

佐藤 栄子

炎帝に茶毘に付される地球ごと

石川 春兎

今年の夏は暑かった。自分も何か句に出来ないものかと挑んだがペンが走らず残念だった。炎帝を持って来た処に、この句の大きき、暑さの厳しさがある。自然には逆らえないが。地球温暖化には今さらではあるが、一人一人が出来る事から始めたい。

## 鈴木 浮葉

ごはん粒で封じた記憶遠花火

佐藤 栄

確かにごはん粒二、三粒伸ばして封筒に封をしました。糊ましてやステック糊など身近にありませんでした。花火や夜店その程度のイベントにも、中々連れて行つてはもらえなかったような。でも子供時代は、不思議さに満ち満ちていました。

## 鈴木 寿江

煮凝りや合点のゆかぬ事ばかり

城内 明子

昨日今日と一日一日老いていきます。バツグに入れたと思った物が入っていないなかつたり、ちよつと置いたものが見つからなかつたり、そんな合点のいかない事が多くなりました。煮凝りの様に溶けてしまいたい。でも、もう少し俳句等々頑張ります。

## 諏訪部典子

あの月が五つならべば恐ろしい

有坂 花野

大空にぽつかりと浮かんだ満月は本当に美しい。作者は、その満月が二つ並んでいたらと思った。更に、三つ並んだら、四つ並んだらと思いを進め、五つ並んだらと思った時には恐ろしくなってしまうたのです。一つだから美しいのです。

## 関 梓

夏草や少し弱気に生きた僕

青木 鶴城

私達は日々色々な選択を求められ生きています。長い一生を恙無く歩むには自分の立ち位置を控え目に置くことが肝要と。豊かな人生を歩いておられる作者の姿が浮かびます。季語の夏草が美しく響いています。

## 玉木 康博

母許へつづくこの道白木樨

秋山ふみ子

木樨は夏から秋にかけて次々と新しい花を咲かせ続ける生命力から、新しい美や信念という花言葉があります。「この道」は意思を持った道と思います。しかも、「白」は純粹を表現しており、実景の句として、きりつとした調べになっています。

## 中田とも子

余生という廊下に立ち止まる良夜

宮崎 斗士

そうなんです！ 余生のない人が多かったその昔、廊下には「戦争」が立っていたのです。平和な現在なればこそ「良夜」が立ち止まれる幸せを改めて思い起しました。

## 夏目 重美

メガソーラー別れ鳥の発ちし後

大森 敦夫

別れ鳥は独り立ちさせる我が子を追いつつ親鳥と子鳥の別れの儀式である。人間臭い季語である。鳥の山は黒く冷たく光る発電設備の山へと変わった。人間と自然の在り方を問う警鐘の一句となった。

## 成戸 寿彦

秋立ちぬ位置を正しく皿二枚

稲吉 豊

最も気になった句。一読、貧困の中の淋しさを詠んだ「秋風や模様のちがふ皿二つ（原石鼎）を思うが、まったく異なる。「秋立ちぬ」と「位置を正しく」から、夏から秋になった喜びすら感じる。今朝の食卓は二人で背筋を伸ばして戴きましようか。

## 南行ひかる

プーチンの貌向日葵の背後から

足立喜美子

花鳥風月も良いがこの様な句にも大いに共鳴。発想の独創性と内容の深さに驚嘆。かの戦争はどう考えても侵略。句中の漢字は顔でなく貌が相応しい。そしてそれは、他人事では無い！ 今日本は、人、物、技術、国土を略奪する国に包囲されているから。

## 西前 千恵

追いかけて祭り阿呆となりにけり

櫻 さとみ

「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らなそんそん」と故郷徳島の阿波踊りを出し、子供の頃御近所の人達と少人数ながら歌い踊ったこと懐かしき思い出しました。追いかけてに祭りを楽しむお気持一杯ですね。私ももう一度阿呆になりたいです。

## 西村 智治

傘畳むやうに八月終りけり

津久井紀代

今年の夏もひどいものだったが、八月というと、それに戦さのむごさが加わる。それが、あっけらかんと終ったというのだから。一つの雨の終りと、八月というものの終りと、その二つの終りを、傘畳むと、作者は、うまく表現しきったようだ。

## 抜山 裕子

差す手より引く手かなしや風の盆

安西 篤

この御句にへたに鑑賞文など書けません。胸に抱き寄せた風の中に、あの人の、彼の人の姿が甦り、耳許で声が囁きかけてくる。哀しくも懐かしい風の盆。

## 根岸 敏三

葉持つ米寿と喜寿や秋の旅

飯田 玉記

掲句は私も実感している。葉箱には曜日ごとに葉を仕分けして、飲み忘れないようにしている。旅行となれば旅の日数に合わせた葉を旅行鞆に入れる。旅行に行かれるお二人に乾杯です。「米寿と喜寿や」と並べた言ったところに旅の期待感が出ている。

## 根岸 操

仕事と家庭以外も団栗とかあるよ

赤野 四羽

なんと気持をほっとさせる句でしょうか。俳句とボランティアで、まるで仕事をしているような忙しい日々。筋肉の衰え防止のための散歩も欠かせない。先日は、団栗がたぐさん落ちていて帽子をかぶったようなのもあった。秋の訪れを感じたのである。

## 野口 佐穂

仕事と家庭以外も団栗とかあるよ

赤野 四羽

人生の大切なものを俳句的に提示。仕事も家庭も大事だけど、人生ってそれだけじゃないよ、って言って出てきたのが団栗。一瞬「えっ」と思うが、やがて「そうだなあ」と納得。「団栗とか」で広がる想像が、とてもいい。拍手です。

## 萩原 美沙

こんなにも暇な時間のある猛暑

宮腰 秀子

私達が暮らす地球。温暖化が年々進み、猛暑の中では何かをやるうとする気力さえ失せてしまい、外出も儘ならない暇な時間が有り過ぎて、退屈している様子をこのように捉えた表現力に感服いたしました。若かりし日の宮腰様が浮かびました。

## 平井 葵

傘畳むやうに八月終りけり

津久井紀代

八月は原爆忌である。地球では理由をつけて領土拡大の争いが続いている。権力者達の欲望と地位を保つ為の仕業からである。誰もが平和な暮しを一番に願う。何か良い知恵を生み出す事は出来ないかと思う日々。今年の八月も傘を畳むように過ぎた。

## 満田 光生

差す手より引く手かなしや風の盆

安西 篤

風の盆の「越中おわら節」の囃子は哀調を帯びるが、作者は手の動きを「かなし」と感じた。勇壮な男踊りも優雅な女踊りも、手を引く動作により哀しさを感じるという感覚が繊細。踊り手は二十五歳まで。若さが却って「かなし」さを感じさせるのか。

## 三池しみず

万緑や吸い込まれゆく地域バス

飛永百合子

地域バスを吸い込むように緑がいっぱいの美しい光景。「吸い込む」の表現が素晴らしいです。路線バスの廃止や減便のニュースを聞きますが、バスは大切な交通手段です。運転手さんの優しい心配りにいつも感謝している私です。

## 望月 哲士

差す手より引く手かなしや風の盆

安西 篤

「風の盆」は、越中おわら節の哀切に満ちた旋律と浴衣等で菅笠を被る踊の姿が流麗で情趣に富んでいるので、観光化されている。元々は祖霊を祀る行事で、その悲しみを踊りの手の動作を捉えて表現され、しかもそれを平仮名で表したところに感銘。

## 山本 徳子

羽拔鶏体力はなく気力のみ

根岸 操

古刹の景であろうか。見るからに鉢は細ってみえる。それでも、らんらんとしている目もとには気力があふれている様にみえる。生きるとは、その気力が大事なのでありましょう。

## 米澤 久子

「おはよう」と今朝も隣家の朝顔に

大槻 正茂

マンシヨンのペランダですね。お隣さん丹精の朝顔に「おはよう」「きれいだよ」と、「今朝も」早起きをして声を掛けている優しい作者の姿が想像できます。爽やかな一日の始まりです。簡潔で気持のよい俳句に魅かれました。

## 渡部 洋一

ひとり住む卒寿の母や鰯雲

小野こうふう

故郷でひとり住むお母さんは卒寿になられお元氣のご様子。「子供には心配をかけたくない」「自分の葬式代は自分で備えておきたい」母、お互い迷惑を掛けないように。しかし、母への思いは今もって離れることにはないです。鰯雲を静かに仰ぎながら…。

## ★鑑賞文についてお願い

一句鑑賞文の執筆ありがとうございます。ご意見を。ご依頼の書面でもお願いしてあります。が、玉稿の分量は六行以内に収めて下さるようご配慮をお願いいたします。(編集部)

## あけぼの便り

○淵田芥門様、拙句への鑑賞ありがとうございます。ございました。(青木 隆)

○紅葉の季節になりました。いつもの散策の道に桜の紅葉や満天星つつじの紅葉を楽しんでいます。(一ノ瀬順子)

○よろしく願っています。(花朶)

○いつもながら、お手数をお掛けします。よろしく願います。(河 順子)

○西前千恵様、拙句を御鑑賞下さり有難うございました。嬉しく拝しました。私ごと日々物忘れの増えて情けない思いをしております。(城内 明子)

○もう少し俳句をたのしみながら作句できればと思う日々です。来年も「楽しみながら作句を」が今の目標です。我妻民雄様、前号にて私の句にご講評くださりありがとうございます。(佐々木克子)

○戸川晟様、前号で拙句のご鑑賞を賜り有難うございました。介護と看取りは「年の順」が落ちつきどころではないと思います。(関 梓)

○医師も世代交代の世。入院経験の多い私には不安が多く、手作業も言葉も不足に思うこの頃です。せめて俳句や文芸作品

は自分の手で書きたい。筆で書けたら尚よいと願っています。(高原 桐)

○前回の「あけぼの」では、猛暑残暑のねざらひがありましたのに。もうお寒うございますになりました。沸騰する地球という句もありましたが、さすがに十一月も末になり北は雪の便り。幹事の皆様何時も大変お世話様です。感謝申し上げます。もうしばらく何とか頑張ります。よろしくお願い致します。(玉木 祐)

○したり、されたり、老々介護の日々です。また一年良い年にしたいです。

○四季の国、日本ですよね！ 秋は何処へ？ 酷暑から、いきなり冬に入った感じですよ。そう遠くない将来二季の国になるのでは…。当たらない事を願います。寝た切りの主人の介護の日々。正に老々介護です。厳しいです。(中田とも子)

○俳句大会において石橋いろり先生より拙句「山の宿敬語のゆるみゆく炉端」を特選にお選び下さり賞品まで頂きました。先生の俳号に助けられたかもしれませんが。兜太先生の句のある袋、大切に使用させていただきます。ありがとうございます。(成戸 寿彦)

○暑い暑いといっていたのも、ついこの前

だと思うのに秋をとばし今度は寒い寒い冬です。体の方がなかなかついていけません。(西前 千恵)

○いつもありがとうございます。よろしくお願ひいたします。(松井 彰穂)

○三池泉様、拙句をとり上げて頂きありがとうございます。元気を頂きました。

○永井潮様、田山光起様、小川紅子様、一句鑑賞にとりあげていただき有難うございました。(三池しみず)

○「二季」になるのでは？ などと聞くと俳句はどうなるのかしらと心配したり、なるようになると聞き直つたりの昨今です。編集の皆様お世話になります。

○冬は冬眠して姿を見せないはずの「熊」が冬の季語とされるのは歳時記の謎の一つでしたが、昨今はそうも言えません。私の郷里では一昨年年末、帰宅したら炬燵に熊が頭を突つ込んでいた、という事件がありました。最近では、市内で一番大きな病院の近所にも出没。出没は通年なので、もう「熊」は無季です。炭焼き・柴刈り等の山仕事を捨てた人間への報いでしょうか。(満田 光生)

○十月初旬、石橋いろり様から投句をお勧め

めいただきました。その際、十月末メチでければ冬の季語と承ったと記憶いたします。(見原万智子)

○今年の猛暑もなんとかのりこえ、やっと秋と思っていいたら急に冬めいてきました。どうぞ編集の皆様、無理せずよろしくお願ひいたします。(宮腰 秀子)

○「猛暑の地球どこにおわすか龍田姫」こんな愚生的一句もあり。秋の喪失。急な冬…。皆様、お身体お大切に!! (武藤 幹)

## 全国大会賞に満田光生さん

現代俳句協会の第六十二回現代俳句全国大会の表彰式が十一月三日、東京上野の東天紅で開催されました。令和七年度同大会へ全国からの応募総数一万三千余句の中で、**満田光生**さんの「**蟲の脚刺さつてゐたる網戸かな**」が最高賞の現代俳句全国大会賞を獲得しました。おめでとうございます。

またこの作品は特別選者中村和弘、久保純夫両氏の特選句にも選ばれました。

## 第8回 俳句研究会

8月23日(土) 立川市子ども未来センター  
担当幹事 満田光生・玉木康博

秋山ふみ子・大森敦夫

青木隆・尾崎太郎

参加者22名

兼題「蜻蛉」または雑詠

★講話なし

甚平着て時計はずしてもう十年 戸川 晟  
この先は蜻蛉の領地道祖神 小山 健介  
言いかけてことは忘れる炎暑かな 尾崎 太郎  
雲水が行くとんばうの空残し 稲吉 豊  
心中の虫も老いたり秋立つ日 水野 星閣  
夏座敷ひとり転べばつきつぎと 石橋いろり  
新涼や皿のふれあふ朝の卓 秋山ふみ子  
手習ひの反古の山積み秋暑し 亀津ひのと  
二輦目の扉は開かず赤蜻蛉 大森 敦夫  
赤ちゃんはまああるく眠り小鳥くる 水落 清子  
種のあるてこそ西瓜やあまのじゃく 飯田 玉記  
投網打ち流星の屑集めけり 森本由美子  
蜻蛉群れ今日は月次上賀茂社 玉木 康博  
廃校の庭に群なす赤蜻蛉 三浦 長閑  
偶然へ棒線を引く流れ星 広井 和之  
山頂に近江の蜻蛉迎へけり 松井 彰子  
富士五湖を哨戒中の鬼やんま 青木 隆  
屑金魚とて最中の皮破り 満田 光生

秋の蛭せめて刹那の情火かな 淵田 芥門  
桐一葉揺り籠のごと落ちにけり 根岸 敏三  
電気釜新調したり秋は来ぬ 櫻 さとみ  
帰国日も記し息子の夏見舞 西前 千恵

## 第9回 俳句研究会

9月27日(土) 立川市子ども未来センター  
担当幹事 石橋いろり・玉木康博

小川紅子・根岸操

秋山ふみ子・尾崎太郎

根岸敏三・青木隆

参加者26名

兼題「鬼灯」または雑詠

★講話なし

秋雨やバスが人待つ峡の村 水落 清子  
鬼灯は朱に妻の髪真つ白に 三浦 長閑  
うつかり深爪むつとりと敬老日 稲吉 豊  
廃校の土手律儀なる曼珠沙華 小山 健介  
そのことに触れず語らず栗ごはん 飯田 玉記  
かはたれや尼寺跡のをとこへし 淵田 芥門  
藪の中居場所がありて曼珠沙華 高瀬多佳子  
色街のしづかに秋の彼岸どき 水野 星閣  
青空の奥の宇宙や秋桜 青木 隆  
あの世にも異変あるらし彼岸花 戸川 晟  
片減りの踊り下駄見せ風の盆 辻 升人  
鬼灯を鳴らせぬままにこの齡 松井 彰子

秋時雨今日のレシビ今日の夫 石橋いろり  
ほほづきの慣らしはじめの酸っぱさよ 根岸 操  
新涼は末世の夜にやつて来る 尾崎 太郎  
ほおずきにこもつていたき日もありて 佐々木克子  
鬼灯で遊ぶ娘の夜店裏 石原 俊彦  
コスモスの淡き色あい母の色 秋山ふみ子  
空中を糸で縫ふごと蜻蛉かな 小川 紅子  
振り向かせたくてほほづき鳴らしけり 満田 光生  
赤道儀微動の先に月の海 大森 敦夫  
花芒登山道をば細めたり 根岸 敏三  
鬼灯を鳴らす子供の得意顔 西前 千恵  
鬼灯よまだ羅生門を生きている 村松 泉  
初ものぶどうひとまず亡父亡母へ 辻 丕子  
うだる湿気海の彼方へ鰯雲 玉木 康博

## 第10回 俳句研究会

10月25日(土) 立川市子ども未来センター  
担当幹事 満田光生・玉木康博

秋山ふみ子・広井和之

尾崎太郎・大森敦夫・青木隆

亀津ひのと・根岸敏三

参加者23名

兼題「菊人形」または雑詠

★講話なし

茶葉蒸らす三分間の秋思かな 秋山ふみ子  
鍵束のひとつは故郷夕時雨 佐々木克子



一頁もう一頁夜長かな 尾崎 太郎

軽トラの笑つて過ぎる豊の秋 水落 清子

秋高し何があろうと急がない 飯田 玉記

燕去り山河たるんでしまひけり 亀津ひのと

言ひ分は熊にもありて紅葉山 稲吉 豊

菊人形うしろにバケツの水一杯 根岸 敏三

天狗栖む山に一灯冬近し 小山 健介

顔は令和の美男菊人形 田村 明通

国許の新酒持ち寄る同窓会 青木 隆

菊人形とふ棺花のごときもの 満田 光生

丹精を込めてうつろの菊人形 三浦 長閑

秋惜しむモダンジャズ漏る新宿の夜に 淵田 芥門

動かざる菊人形の目の潤み 松井 彰子

菊人形語る戦史のつばらかに 秋山ふみ子

かぼちゃ穴のぞけば祭り聞こえそう 村松 泉

気配は歩く菊人形の行列か 高瀬多佳子

行く人の服装に知る暮の秋 戸川 晟

天平の裳裾ひらめく花カンナ 広井 和之

菊人形空から見てゐるドロインの眼 大森 敦夫

白髭にひたひた浸る濁り酒 玉木 康博

七五三千歳飴手に兄弟 西前 千恵

石橋いろり・亀津ひのと

参加者21名

兼題「時雨」または雑詠

★講話なし

ユトリ口の白ならきつと時雨くる 佐々木克子

西口の時雨に別れそれつきり 小山 健介

小夜時雨持つていきなと派手な傘 田村 明通

空腹の熊は眠らず山眠る 亀津ひのと

里しぐれ会えない人の多きこと 石橋いろり

おほかたは海へ向く墓石路の花 秋山ふみ子

あんばんの臍のしよつばさ初時雨 根岸 操

だれからも遠くなる椅子夕時雨 水落 清子

深秋の以呂波にほへとはけの森 三浦 長閑

目礼しすれ違う女冬の蝶 高瀬多佳子

大根引く多摩丘陵の見える畑 根岸 敏三

初抱の曾孫のおもさ冬ぬくし 西前 千恵

満月や己が孤影を地に曳いて 辻 升人

乱れ散る刀鍛冶の火夕時雨 青木 隆

爪切つて飛ばす勤労感謝の日 稲吉 豊

野良猫のじつと見ている時雨空 尾崎 太郎

知らぬ間に捨てられちやつた冬帽子 野口 佐稔

つらくとも行かねばならぬ私の細道 辻 丕子

山の墓地微かな風に紅葉降る 飯田 玉記

片時雨晴れ側を見る急ぎ足 広井 和之

小夜しぐれ出廻らしの茶に駄句の山 淵田 芥門

## 俳句研究会の兼題について

昨年から兼題を設けていますが、三句の内一句以上に入れて下さい。兼題は現代俳句協会の多摩地区のホームページにも載っています。

2月 「春疾風」

4月 「萩若葉」 或いは「数字を詠み込んだ句」

5月 「晶子忌」 或いは「オノマトベを詠み込んだ句」

## 永年会員記念作品

現代俳句協会は在籍七十年、五十年、四十年、三十年に達した会員を顕彰しその作品を掲載しています。昨年度当地区の会員の作品は次の通りです。

### 四十年永年会員作品

豊かなる風のおいの九月かな

山崎せつ子

### 三十年永年会員作品

春惜しむ遠まなざしの犬連れて

岡本 久一

名月が二つに見える眼で暮す

城内 明子

## 第11回 俳句研究会

11月29日(土) 立川市子ども未来センター

担当幹事 根岸操・秋山ふみ子

小山健介・青木隆・尾崎太郎

## 府中市郷土の森 秋の吟行会

十一月一日、三連休の初日に多摩地区現代俳句協会の秋の吟行会が行われました。

前日の雨も上がり肌寒くはありましたが、上々の吟行日和となりました。府中市郷土の森は今まで何度か多摩地区現代俳句協会でも訪れている吟行地です。

広大な敷地に武蔵野の地形をいかし、様々な樹木や草花が植えられて、四季折々訪れる人々を楽しませてくれます。又、明治、大正、昭和などの古い建造物も復元され、府中の歴史等も知ることが出来ます。

集合は十時半に博物館前、参加者は十三名でした。点呼の後、銘々が府中市郷土の森へと散策を始めました。

晩秋とはいえ、昨今の天候不順により紅葉や落葉もまだまだでしたが、それなりの風情がありました。昨夜の雨の名残りで樹木や草々もしっとり濡れ、しじみ蝶や黄色い蝶も飛び交って目を楽しませてくれます。ハケ下を流れる水の音もひときわ強く耳に残りました。

句会場は郷土の森博物館の一階会議室で二句投句、五句選です。句会は一時半より開始されました。人数は十三名とやや少数でしたが、その分句評や鑑賞を話す時間は

たっぷりとあり、とても充実した句会となったと思います。高得点句七位までの方に水野会長より賞品が手渡されました。その後恒例の写真撮影が行われ和気あいあいの内に閉会となりました。

当日新たに参加された二名の方は、当吟行地の近くにお住まいとか。府中市郷土の森の話を色々して下さりとても有難かったです。お礼を申し上げます。

(秋山ふみ子記)

## 秋の吟行会作品

### 〈上位入選七句〉

飛石を伝ふ子につく秋の蝶 水野 星閣  
あぶれ蚊や木造校舎ひとめぐり 秋山ふみ子  
手が胸にとけつつ秋の馬頭観音 大石 雄鬼  
古民家へ水音聞きつつ辿る秋 米山多賀子  
秋思ふと茅葺き屋根の薄もみち 三浦 長閑  
花の木の名札のみなる十一月 広井 和之  
石組みの井戸の底には隕石きしむ 森本由美子

### 〈二人一句〉

平右衛門の懷抜ける秋の風 島崎 栄子  
珪化木幾千万の秋を経て 尾崎 太郎  
新薬を嗅ぐ父の胸広きかな 根岸 操  
冬日受け床黒光りの町役場 根岸 敏三  
まいまいず早くも枯葉落ちるかな 玉木 康博

枯れ枝のバイオネストに小春風 石橋いろり

吟行会全員



# 第43回東京多摩地区現代俳句協会俳句大会

十月十三日快晴のスポーツの日、初めて大会会場となった立川市子ども未来センターに四二名が参加。一時半から満田光生幹事の司会で開始。会歌「多摩のあけぼの」を全員で斉唱。小山健介氏の開会の言葉では、会歌の由来を紹介。水野星闇会長の挨拶では、「多摩地区は全国の中でも長い歴史を持っている。六五四句、一三〇名の投句があり、全員による選句は多摩地区の特徴だ」と話された。ご来賓の羽村美和子千葉県協会長、平田薫神奈川県協会長、瀬藤芳郎東京都協会幹事長より挨拶をいただいた。

続いて、黒岩徳将現俳協青年部長の「俳句の両極」今私たちは何を考えるべきか」と題する講演。「個々人が俳句について思うことを意見交換し合う。その行く先に、個々の俳人の凝縮された俳句観のぶつかりあい、俳句の『両極』がある。」「今私が最も俳句に足りていないと思う『一句の肯定評と否定評の共存』の例を挙げる。強く反発し合うことは新たなエネルギーを生む。」とする。例えば、高野素十の「甘草の芽のとびとびの

ひとならび」について、虚子と水原秋櫻子の対立（「自然の真と文芸上の真」）を挙げる。加藤楸邨の「鰯雲人に告ぐべきことならず」について、高柳重信と山本健吉・平井照敏・鷹羽狩行との間に、現実世界の手触りを基盤にするか、言葉の自立性を重んじるかの差異を指摘する。金子兜太の「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」についての草田男の添削も紹介される。楸邨の鰯雲の句を青木亮人が「もはや『大きくて野暮』な何かで勝負する時代ではなくなつた」と評したが、黒岩氏は「大きくて野暮」が再興している気配は見られないが、『うまい句』に対しての意識については変容がある」とする。

俳句大会は、上位二〇名の入賞作品を発表。大会賞は原田洋子氏の「逃げ水を追って戻らぬガザの子ら」。続いて、黒岩徳将、羽村美和子、平田薫、瀬藤芳郎、安西篤、前田弘、神野紗希、宮崎斗士、大井恒行の諸氏を始め二六名の大会選者による特選作品を発表。選者から講評。地区協報告と行事案内。根岸敏三幹事長の閉会の言葉。写真撮影。（広井和之記）



大会全員写真

## 第43回 俳句大会 入賞作品

### 〈大会賞〉

逃水を追って戻らぬガザの子ら

原田 洋子

### 〈上位入賞句〉

落蟬の鳴き尽したる軽さかな 三浦 文子  
 肉球の先まで欠伸 春隣 金子うさぎ  
 二股の大根ですが無実です 桑田 制三  
 ひとりにはできない人と枇杷を剥く 吉田 典子  
 レコードにそつと針置く昭和の日 永井 潮  
 無言館出てなお無言かなかな 戸川 晟  
 右脳には水母が棲んでいる気配 大西 恵  
 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治  
 青葉騒隙間だらけの記憶かな 川島由美子

### 〈大会選者の特選句〉

黒岩 徳将 選  
 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤  
 羽村美和子 選  
 釈迦に会はんと穀象の鼻に乗る 広井 和之

平田 薫 選

カナンにもウクライナにも天の川 青木 隆

瀬藤 芳郎 選

逃水を追って戻らぬガザの子ら 原田 洋子

安西 篤 選

無言館出てなお無言かなかな 戸川 晟

前田 弘 選

夕端居空が明日へ届くまで 関口 ミツ

吉村春風子 選

まだ助走夏は本気を超えている 吉田 典子

冬木 喬 選

B 29を覚えていゝるか向日葵よ 永井 潮

三池 泉 選

太陽がすぐそこにある暑さかな 永井 潮

三浦 長閑 選

レコードにそつと針置く昭和の日 永井 潮

江中 真弓 選

落蟬の鳴き尽したる軽さかな 三浦 文子

津久井紀代 選

やさしさを形にしたら吾亦紅 水落 清子

神野紗希 選

八月のホースの振れ解く水 栗原かつ代

宮崎 斗士 選

浮いてこい残してあるよ君の下駄 吉田 典子

赤野 四羽 選

ナルシストクラブ設立寒椿 羽村美和子

大井 恒行 選

無言館出てなお無言かなかな 戸川 晟

水野 星閣 選

一心と無心は似たり蟬の鳴く 吉村春風子

根岸 敏三 選

新茶から故郷自慢の花が咲き 齋木 和俊

永井 潮 選

いちめんの青田は越の国を統ぶ 水野 星閣

石橋いろり 選

山の宿敬語のゆるみゆく炉端 成戸 寿彦

小山 健介 選

逃水を追って戻らぬガザの子ら 原田 洋子

根岸 操 選

柿の花こぼるる音やガザ遠く 武田みどり

蓮見 徳郎 選

逃水を追って戻らぬガザの子ら 原田 洋子

大森 敦夫 選

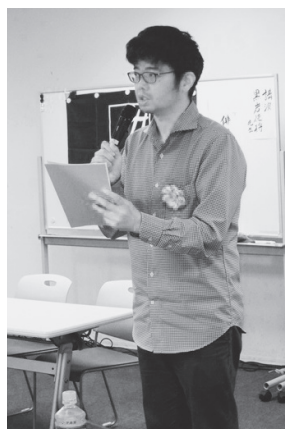
どこよりか圏外となり枯野かな 西村 智治

佐々木克子 選

桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

大石 雄鬼 選

揚羽蝶ここがいちばん奥のほう 平田 薫



黒岩徳将先生による講評



二位入賞の三浦文子さんによる受賞挨拶



水野星間会長挨拶



石橋いろり副会長による成績発表



司会の満田光生幹事



会歌斉唱



特選句披講の根岸操幹事（右）と秋山ふみ子幹事



## 事務局だより

○東京多摩地区の活動予定などはホームページからもご覧になれます。句会の課題もご確認いただけます。(永井・亀津幹事担当)  
「現代俳句協会」から「東京多摩」へと進んでください。

## ★令和8年度定時総会

日時 令和8年3月20日(金・祝)

午後1時開場 午後1時30分開会

場所 立川市子ども未来センター 2F会議室  
(JR中央線立川駅南口、徒歩13分)

★従来の陽春句会は取りやめ、出席者による持ち寄り句会を行います。事前投句はありません。(午後1時15分投句締切 一句)

## ★会員の現況(12月末現在)

209名(正会員163名・一般会員46名)

☆新入会員 2名(数称略) \*印は正会員

\*見原万智子(小平市) 金子うさぎ(熊谷市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(新規入会の方は申し込み手続きが必要)。

その他一般の方は年会費2千円です。

お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」 編集担当幹事

青木 隆(隆) 満田 光生(光)

飛永百合子(百) 永井 潮(潮)

## ◇◇◇◇◇ ご案内 ◇◇◇◇◇

### 俳句研究会

第2回 2月21日(土) 午後1時

兼題「春疾風」

立川市子ども未来センター  
立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)  
電話042・529・8682

第3回

第4回

第5回

立川市子ども未来センター  
5月23日(土) 午後1時  
兼題「一品忌」或いはオノマトペ  
立川市子ども未来センター  
(いずれも会費千円、出句兼題を含む三句)

第6回

第7回

第8回

第9回

第10回

第11回

第12回

## 地区会報発行回数の減について

会長 水野 星閣

会報「多摩のあけぼの」は、長年にわたり年間四回の刊行を維持して来ましたが、近年の諸物価高騰の影響もあり、会の収支は年毎に厳しさを増しています。加えて、編集体制も高齢化の影響が避けられず、人員の確保に苦慮する有様です。この為、今後、当会としては発行回数を年三回に減らざるを得なくなりました。従来よりの掲載内容を維持し、更なる質の向上をめざして参りますので、何卒ご理解をお願いいたします。

## 編集後記

☆あけぼの集投句や一句鑑賞文寄稿を速達でいただく場合がありますが、一日二日を争う訳ではないので普通郵便で結構です。またFAXの宛先は 042-1636-2272です。(隆)  
☆現代俳句全国大会に出席して、青年の部受賞者のコメントに感心。みんな意識が高い。我々の句会には何故こういう若手が現れないのだろうか、と、いたく考えさせられた。

☆ふる里にも熊が出没して、庭には鹿が来るのが日常茶飯事だという。これまではあり得なかったこと。地球が、世界が、日本もおかしくなってきた。一年の平穏無事を祈るばかり。(百)

☆昨年の選ばれた漢字は「熊」だった。夏の暑さと共に報道の話題で賑わった。投稿いただいた俳句にも散見される。でも、猛暑も熊の出没も困ったことだがこれからもずっと続くのではないかと。天候は難しいが、熊とは知恵を出して何とか共生したい。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

令和八年一月三十一日発行

発行人 水野星閣

編集人 永井潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-10-7

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

E-mail hitemono@ybone.jp

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 042-620-2626